

で、加山雄三の若大将シリーズやもろもろの映画の写真がびっしりと貼ってあって「ああ、これほど主役を好きにならないと映画は撮れないものか」と感心した覚えがある。

わたしの知り合いの映画監督に小谷承靖監督がいる。東宝の監督だった人である。加山雄三主演の映画を多く撮った監督である。わたしが岡本喜八監督に

「映画監督は諦めろ」と諭されていた時代に東宝から映画監督としてデビューしている。東宝が3年にたった一人、助監督を採用した時代に東大を卒業して東宝に入社している。成城にある小谷監督の家にお邪魔したことがある。玄関からリビングま

た。司葉子と加山雄三の「乱れ雲」では成瀬巳喜男監督の助監督をしていたらしい。詳しく内容を書く余裕はないが、加山雄三が車ではねて死なせた男の妻が司葉子である。やがて、2人は惹かれ合うようになる。が、2人が結ばれようとする旅の宿で交

しみを感じた。隠岐の島には鳥取の堺港からの定期船がある。小谷監督の実家を訪ねた映画人が「凄（ひど）い家ですよ」と言っている。相当の旧家らしい。わが家にもよく遊びにみえた。煙草はピースを吸っていた。インテリの煙草である。映画の話もよくし

## 人間ドラマ映画で

ない人のようであった。「わたしも映画を撮りたいのだけ」と言う。「ああ、あなたなら撮れる」と励ましてくれた。わたしの舞台もよく観に来てくれて「映像タッチなんだよなあ」と感嘆してくれた。確かに、わたしは映像を意識した演出をしていた。

通事故を自撃する。過去が蘇（よみがえ）るのである。そのシーンで加山雄三が歌う「南部牛追い唄」がいと言う「ああ、あれは俺も好きなシーンだ」と意見が一致した。わたしは小谷承靖監督が羨（うらや）ましかった。まるで挫折を知ら

夫もロマンポルノの役名をそのまま芸名にしたはずである。もし「知覧にて」の映画化が実現すれば、まず小谷承靖監督に観てもらいたいものである。わたしが30を過ぎた頃、映画の師匠岡本喜八監督が「もう映画を撮った方がいいよ」と言ってく

れた。立て続けにわたしの舞台を観ての台詞であった。しかし、映画監督をやるのは少し早いような気もした。今は歌手もタレントも映画監督をやる時代である。撮影所で20年30年と助監督をやってから監督になる時代ではない。スタッフにベテランが揃えば、だれでも映画は撮れるのかもしれない。ただ、そんな映画ではない人間な人間が動いている人間ドラマを撮りたい。